

## 台湾高砂族の研究 : 高砂族の研究史と分類(一)

土居, 平  
九州大学医療技術短期大学部一般教育

<https://doi.org/10.15017/158>

---

出版情報 : 九州大学医療技術短期大学部紀要. 13, pp.59-65, 1986-02-28. 九州大学医療技術短期大学部  
バージョン :  
権利関係 :

# 台湾高砂族の研究

—— 高砂族の研究史と分類（一） ——

土 居 平\*

A Study on the Formosan Aborigines - (1) -

Taira Doi

## 1.

日清戦争後、下関講和条約第2条23号による台湾省全部の日本領有決定に先立って、全権大使李鴻章は「台湾ニハ強悍ナル潮惠漳泉ノ移民ノ外島内十ノ六余ニ占居スル化外ノ生蕃アリ」<sup>①</sup>と述べ、台湾統治の困難を指摘してその割譲を断念させようとした。漢民族によって化外の生蕃とされたのが、いわゆる高砂族である。

我が国では、現在でも台湾土着民族のことを高砂族と称しているが、この呼称は1923年に提唱されて以来徐々に普及していったものである。それまでは、漢民族の呼称に従ってその漢化の程度によって「生蕃」「熟蕃」「化蕃」などと呼ばれ、「生蕃」の居住する地域を「蕃地」とか「蕃界」などと称していた。

しかし高砂族という呼称が、公的に採用されることになったのは、ずっと後のことであって、生蕃、熟蕃あるいは化蕃といった呼称は、領台後もかなり長い間使用されることになった。

本稿では、高砂族の呼称と分類とに関する試みを回顧しながら、台湾土着民族研究の歴史を辿ってみることにした。それが主として文化人類学や、社会学の分野に限定されることになるのは当然である。

高砂族の呼称が定着してからも、その中にいわゆる「熟蕃」である「平埔族」を含むかどうかで、広義の高砂族、狭義の高砂族と呼ばれたり、あるいはそのことにふれないでいるものも見受けられる。またその分類に関しても、当初から必ずしも一致していた訳ではなかった。

台湾高砂族の宗教現象について貴重な研究を残されている古野清人氏は、「高砂族(高山族)はいわゆる熟蕃を除けば……」と述べ、高砂族に熟蕃(平埔族)を含め、熟蕃以外に次の7種族を挙げている。<sup>②</sup>

1. アタヤル族(セデク族を含む)
2. サイシアト族
3. ブヌン族
4. ツォウ族(カナカブ族, サアルア族を含む)
5. パイワン族(ルカイ, パナパナヤン族を含む)
6. アミ族
7. ヤミ族

また、戦前からの高砂族研究の第一人者である馬淵東一氏は、いわゆる蕃地の高砂族にアミ族やピュマ族を含めてよいが、熟蕃は漢民族と相当混血しているとともに、固有の生活様式を殆んど失っているために、これを除外するとしながら、同時に「本誌所載の3論文では、高砂族という称呼を生蕃・熟蕃双方を含む意味で一貫して使用するつもり」<sup>③</sup>とも述べられている。その後の文献<sup>④</sup>などからして、高砂族を広義、狭義に分けて使用されていることが判る。広義というのは、高砂族にいわゆる熟蕃(平埔族)を含むということである。

民族音楽の研究者小泉文夫氏は、1978年に『世界の民族音楽シリーズ』の1枚として『高砂族の歌』(1973年録音)のレコードを出している(発売元:キングレコード株式会社 GXC-5002)。その解説では「高砂族という名称は日本人がつけたもので、一種の理想郷と考えられる高砂の蓬萊山に住む人々という意味」で「戦後は台湾では山地同胞(略して山胞)あるいは台

\*九州大学医療技術短期大学部一般教育

湾土着民とか台湾原住民」と呼ばれていると記している。このレコードでは10部族すべての音楽を収録したとして次の各部族を取り上げている。

1. パイワン族
2. ルカイ族
3. ヤミ族
4. プユマ族
5. ツォー族
6. アミ族
7. サウ族
8. ブヌン族
9. セデック族
10. サイシャツ族

ここではタイヤル族の亜族セデック族が挙げられているし、またサウ族を含ませて、10部族としている。平埔族については言及されていないが、これを除外しているとみてよかろう。

さらに比較的最近の著書からいくつかをみると、戦後の高砂族研究で業績をあげている末成道男氏は、平埔族は漢民族との同化が進んでいるために、便宜上高砂族に含めないことが多い、と述べ、「平埔族を除く狭義の高砂族は23万人（1964）で、9種族に分かれる」<sup>⑤</sup>と記述している。

一方、台湾出身の戴国輝氏は「台湾には現在約二十万人前後の高山族と呼ばれる少数民族が住んでいる。高山族は概称であって、人類学者は彼らをアタヤル Atayal 族、サイシャット Saisiat 族、ツォウ族、ブヌン Bunun 族、ルカイ Rukai 族、パイワン Paiwan 族、パンツァ Pangtsah 族（アミ Ami 族）、ピューマ（プユマ Puyma）族、ヤミ Yami 族の九系統に分類している」とし、「一般に高山族と言う場合は山地地区に居住する未漢化少数民族（漢化され、平地に住む、かつて熟蕃もしくは平埔蕃といわれた人々は除外される）だけを指す」と述べ、平埔族を除外している。続けて「今でこそ高山族もしくは山地同胞（略称して「山胞」ともいい、大別しては山地山胞、平地山胞と呼称）と呼ばれるこれら少数民族も、もとをたどれば漢

族系住民によって蕃人または生蕃、熟蕃などと蔑称されていた。」という。<sup>⑥</sup>

1945年の光復後の台湾では、高砂族という呼称に代わって、前記の高山族、山地同胞（山胞）などの呼称が使用されている。学術関係の文献では「台湾土著民族」「高山族」の呼称が一般的で、行政上では山地同胞の語が使用されているようである。

しかしこの高山族という呼称については、馬淵東一氏の見解<sup>④</sup>とともに、台湾における高砂族研究者である陳奇祿氏は次のように発言している。すなわち「高山族（日本の学者は高砂族と呼んでいる）とは実は間違った名称である。というのは、蘭嶼（以前は紅頭嶼と称した）におけるヤミ族の六つの村落は、みな海拔50メートル以下の地にあり、東海岸のアミ族の村落もまた、海拔100メートル以上の地にあるものはない。であるから、平地に住む土着諸族は、平地高山族または平地山胞ともいう」と指摘して、「台湾の土着民族の分類は昔の漢化程度による分類法から脱出する」必要があるとし「アタヤル、サイシャット、ブヌン、ツォウ、パイワン、ルカイ、プユマ、アミ、ヤミ、サウ」の10族を提示している。サウ族を加えて10族とする考え方については、あるいは異論があるかも知れないが注目すべき見解の一つであろう。

なお、こうした種族名を漢字で表記する場合に、どのような字を当てるかの問題が出てくるが、台湾では、1953年に各著者の表記法を整理して次のような統一が行われた（表-1参照）。

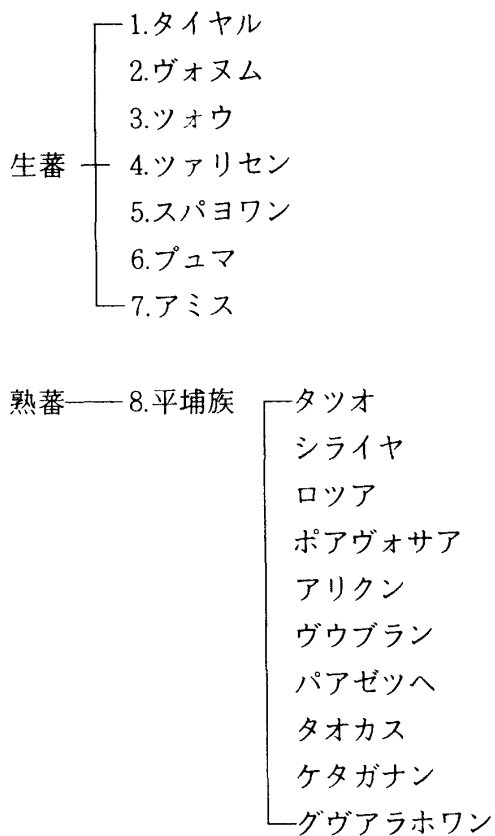
## 2.

ところで、こうした台湾土着民族に関する研究は、統治上からも、また山地資源の開発の面からも緊急な課題で、それは過去、台湾を支配下においたオランダ、スペインにしても、また清朝にしても同様であった。

台湾土着民族に関する分類の試みは、オランダ、スペイン、清朝などによって部分的には行われたようであるが、それは当時、その支配下にあった地域についての断片的なものに止まっ

たといえる。したがって台湾全体の土着民族についての分類は、日本人の手によって初めて行われることになる。

そして「土蕃の棲住する一帯の如きは、既往に於いて、及び現在に於いて、亦実に闇黒台湾たるを免れ」ない蕃地の探検を200日にわたって実施したのは伊能嘉矩、栗野伝之丞の両氏であった。<sup>⑧</sup> その成果は『台湾蕃人事情』として1900年に公刊されている。ここでは、いわゆる生蕃を7種族に、熟蕃を平埔族としてこれを10族に分類している。<sup>⑨</sup>

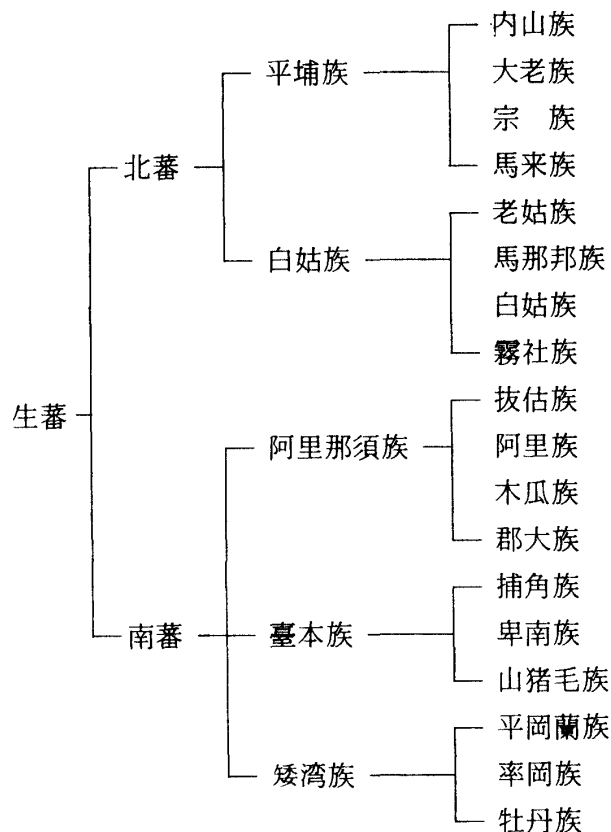


この時点では、ヤミ族の記載がなく、『台湾志』で記載されることになる。<sup>⑩</sup>

その後若干の変移はあるにしても、ともかく台湾土着民族分類の基礎は、一応確立したといえよう。

これより先、1896年に発行されている『台湾蕃俗図会』によると、福岡県人の入江英氏が「某將軍の命を奉し某少佐に従いて遍く生蕃地を跋渉」して得たとされる資料が記載されている。その中に写生図として、「大日本帝国台湾

略図」や、「北蕃家屋の図」「老狗族家屋の図」「生蕃人首級を得て婚姻を結ぶの図」「北蕃人祭儀の図」などがあって、タイヤル族の服装、楽器、武器、入れ墨、首架、酒壺、鍋、馘首された生首等がかなり正確に描かれている。さらに何を基準にしたのか不明だが、いわゆる生蕃に関して次のような分類も記載されている。<sup>⑪</sup>



また、1900年に発行された『台湾地誌及言語集』では、平埔族のほかには僅かに3種族（パーワン、デポン、アミヤス）<sup>⑫</sup> が記載されているに過ぎない。

明治30年代の台湾土着民族研究者として重要な地位を占めるのは、鳥居龍藏、森丑之助の両氏である。

鳥居氏は「流血を好む原住民のもとで504日を過ごした」と記録しているように、4回におよぶ台湾調査旅行を実施している。<sup>⑬⑭⑮</sup>

第1次調査旅行(1896年10月初旬～12月下旬)

アミ族、タイヤル族、ピウマ族、ブヌン族  
第2次調査旅行(1897年10月～1898年1月)  
紅頭嶼調査(ヤミ族)

第3次調査旅行(1898年10月～12月)

パイワン族, アミ族, ピウマ族, ツアリセン族

第4次調査旅行(1899年1月～10月末)

パイワン族, ツアリセリン族, 新高族, ブヌン族, サウ族, 平埔族

この調査旅行の中で, 第2次調査の意義はとりわけ大きく, 紅頭嶼の土着民族が鳥井氏によって初めてヤミ族と命名されることになる。

鳥居氏は「もっぱら習俗, 言語, 伝承, 風俗慣習等々にもとづく」分類で「人類学的見地からの諸特徴については他日の研究に留保」するとした上で, 次のような分類を提示した。

- I. タイヤル, あるいは文身蕃
- II. 新高
- III. ブヌン
- IV. サウ
- V. ツアリセン
- VI. パイワン
- VII. ピウマ, あるいは卑南蕃
- VIII. 阿眉
- IX. ヤミ, あるいはグルグル・セラ

一方の森丑之助氏は, 早くも1895年9月には台湾に入り「その多くの歳月は蕃地の探検に費し, 踏査地域は全蕃地に及」んだという。そしていわゆる生蕃を次の6種族に分類した。<sup>⑬</sup>

1. タイヤル
2. ブヌン
3. ツオウ
4. パイワン
5. アミ
6. ヤミ

森氏は「台湾蕃族志十巻同蕃族図譜十巻を完脩」することを計画したが, 関東大震災後に不慮の死を遂げ『台湾蕃族志』1巻, 『同蕃族図譜』2巻の刊行に止まった。台湾の土着民族居住地の殆ど全域に足跡を残した森氏が, 予告したとおりの著書を残していたとすれば, その披益するところは極めて大きかったであろう。

こうして, 我が国の台湾領有後かなり早い時期に, その土着民族の分類はほぼ完成し, その後はこれら先人の業績を中心に, 若干の変容が

みられる程度である。

次に, 台湾総督府ではどのような分類を採用したのであろうか。

まず1911年に総督府蕃務本署で出したReport on the Control of the Aborigines in Formosa』においては9種族が示されている。<sup>⑭</sup>

1. Taiyal
2. Bunun
3. Tsuou
4. Tsarisen
5. Paiwan
6. Piyuma
7. Ami
8. Yami
9. Saisett

この中には, これまではいわゆる熟蕃とされていたサイシャット族が含まれている。この種族は, 鳥居, 伊能, 森の各氏によっていずれも除外されていたものである。

さらにその翌年から始まった「蕃社戸口」調査において, ツアリセン, ピウマをパイワン族に含めることにして, これ以降は7種族とする分類が定着することになった。

台湾総督府発行『台湾事情—昭和9年版』などにおいても, この7種族分類は引き継がれている。なお本書では「生蕃人は主として山地に居住し」と記しているように, 依然として生蕃の文字が使用されている。

1935年になると, 台湾総督府は種族欄の記載要綱として, 内地人(日本人)と本島人とに大別して, 本島人を福建族, 広東族, 其の他の漢族, 平埔族, 高砂族とすることを, 戸口調査規定で定めた。<sup>⑮</sup> いわゆる生蕃から高砂族への公式な改称である。

当時, 蕃地といわれたのは「東台湾東方海上に点在する紅頭嶼の北緯二十二度二十秒より, 台北州タンピヤ社の二十四度五十三分, 東経一二十度三七分より一二一度五十分の間に位置する地域」<sup>⑯</sup>を指し, 蕃地高砂族(理蕃の対象になる)としてはタイヤル, サイセツ, ブヌン, ツオウ, パイワン, ヤミの6種族が挙げられて

いる。したがってアミ族とパイワン族の一部は特別行政区ではなく、普通行政区に所属していた。こうした点から特別行政区の高砂族を蕃地高砂族、山地高砂族などと呼ぶこともあった。

以上のことから、少なくとも1935年にはいわゆる生蕃＝高砂族、熟蕃＝平埔族という呼称が、公式に明確化したことになる。しかし現実にはこれから先も、高砂族の呼称は広、狭両義に使用されていくことになる（表－2参照）。

ところで台湾総督府は、1901年に臨時台湾旧慣調査会を設置（同年10月『臨時台湾旧慣調査会規則』公布—法制及び農工商経済に関する旧慣を調査）することになった。当初は漢民族に族に関する旧慣、慣習法の調査が実施され、その報告書が公刊されていった。そしてこの事業が一段落した1909年に、第一部行政科から蕃族科が分立して予備的な実地踏査が試みられたが、調査員で馘首される者がでるなど、当時はいわゆる蕃害の為に踏査は難航し、本格的な踏査は大正時代にはいつてからといわれる。<sup>20)</sup>

このことは、一面からすれば、旧慣がそれだけ保存されていたことを物語るわけで、当時の貴重な資料が直接収集されたことにもなる。この調査会によって実施された調査結果は次のような形で報告されている。高砂族研究の基本的な文献として、今日なお高く評価されている。

『蕃族慣習調査報告書』 全8冊

- 小島由道、安原信三『蕃族慣習調査報告書  
第1巻 たいやる族』1915年  
河野嘉六 『蕃族慣習調査報告書  
第2巻あみす族・ぶゆま族』  
1915年

- 小島由道、安原信三『蕃族慣習調査報告書  
第3巻 さいせつと族』  
小島由道 『蕃族慣習調査報告書  
第4巻 そう族（ツオウ族）』  
小島由道、河野嘉六『蕃族慣習調査報告書  
第5巻の1 ばいわぬ族』  
小島由道、河野嘉六『蕃族慣習調査報告書  
第5巻の2 欠巻  
『蕃族慣習調査報告書  
第5巻の3 ばいわぬ族』  
『蕃族慣習調査報告書  
第5巻の4 ばいわぬ族』  
『蕃族慣習調査報告書  
第5巻の5 ばいわぬ族』

- 『蕃族調査報告書』全八冊 佐山融吉著  
阿眉族南勢蕃馬蘭社卑南卑南社 1913年  
阿眉族奇密社馬太鞍社太巴 社海岸蕃 1914年  
曹族阿里山蕃四社蕃簡仔霧蕃 1915年  
紗績族霧社蕃船佗蕃卓犖蕃太魯閣蕃船賽蕃木  
爪蕃 1917年  
大么族前編：大崙崙蕃合歡蕃馬利古灑蕃北勢  
蕃南勢蕃白狗蕃司加耶武蕃沙拉茅蕃萬大蕃眉  
原蕃南 蕃溪頭蕃 1918年  
武崙族前編：巒蕃達啓 加蕃丹蕃 蕃干卓萬  
蕃卓社蕃 1919年  
大么族後篇：加拉夕蕃含加路巴思誇蘭蕃鹿場  
蕃汶山蕃大湖蕃屈尺蕃 拿餌蕃 1920年  
排灣族、獅設族 1921年

この調査会と、昭和2年に創設された台北帝国大学土俗人種学教室の業績や、研究者などについては次号に譲ることにしたい。

※ 本稿は昭和60年度文部省科学研究費による研究の一端である。

表—1 台湾土着民族漢文名称対照表

1. 本刊採用名稱	泰雅	賽夏	布農	鄒	魯凱	排灣	卑南	阿美	雅美
2. 西文拼音	Atayal	Saisiyat	Bunun	Tsou	Rukai	Paiwan	Puyuma	Ami	Yami
3. 烏居龍藏	有鯨蕃	—	高山蕃	—	—	—	卑南蕃	阿眉	—
4. 佐山融吉	太么	獅設	武崙	曹	—	排灣	卑南	阿眉	—
5. 林惠祥	太么	薩依設特	蒲嫩	朱歐	—	派宛	—	阿眉	野眉
6. 王興瑞	台耶魯	沙色特	步怒	主阿	—	巴溫	—	亞美	耶美
7. 徐子爲 潘公昭	太么	薩依設特	蒲嫩	朱歐	魯卡衣	派宛	普猶馬	阿眉	野眉
8. 鄭伯彬	大野羅	薩雪特	布濃	卓	—	派溫	漂馬	阿眉	牙眉
9. 宋家泰	大野兒	噠隋之	保隆	曹米	—	培旺	—	阿米	亞米
10. 臺灣大學	泰耶魯	賽薩特	布農	鄒	魯凱	排灣	畢瑪	阿美	耶美
11. 陳正祥	塔伊洋魯	薩衣塞特	浦濃	茲歐	—	帕伊旺	—	阿眉	揚米
12. 臺灣省文獻委員會	泰雅	賽夏	布農	曹	魯凱	排灣	卑南	邦則	雅眉
13. 衛惠林	阿達雅爾	賽西亞特	布農	曹	澤利先	排灣	漂馬	阿眉	雅眉
14. 臺灣省民政廳	泰雅魯	塞薩特	不奴	茲歐	—	拔灣	—	阿美	耶美
15. 芮逸夫	泰雅爾	賽夏特	布農	曹	魯凱	排灣	畢瑪	阿美	耶美

「国立台湾大学考古人類学刊」第1期 1953年, p. 37

表—2 高砂族の分類

欧 文	Atayal	Saisiyat	Bunun	Thao	Tsou	Rukai	Tsarisen	Paiwan	Puyuma	Ami	Yami	Peipo
中 文	泰雅族	賽夏族	布農族	邵 族	鄒 族	魯凱族	傀儡族	排灣族	卑南族	阿美族	雅美族	平埔族
吉原 弥生 文献目録	泰雅族	賽夏族	布農族	邵 族	鄒 族	魯凱族	傀儡族	排灣族	卑南族	阿美族	雅美族	平埔族
伊能 嘉矩 栗野伝之丞	アタイヤル	—	ヴォヌム	—	ツォウ	—	ツアリセン	パイワン	プユマ	アミス	—	ペイボ
烏居 龍藏	タイヤル (文身族)	平埔族と した	ブヌン	サウ	ニイタカ	—	ツアリセン	パイワン	ピユマ (卑南族)	アミ (阿眉族)	ヤミ (グル グル・セラ)	
森 丑之助	タイヤル	山地蕃か ら除外	ブヌン	—	ツォウ	—	バ イ ワ ン			アミ	ヤミ	
小島 由道	タイヤルと セーダッカ	サイ セット	ブヌン	—	ツォウ	ルカイ	バ イ ワ ン			アミ	ヤミ	
原語による 伝説集	タイヤルと セデク	サイ セット	ブヌン	—	ツォウ	ルカイ	パイワン (ルカイ以 外のツアリセンを含む)		ピユマ	アミ	ヤミ	
系統所属の 研究	アタイヤル	サイ シャット	ブヌン	—	ツォウ	ルカイ (ツア リセンの北 部・東北部)	—	パイワン	バナバ ナヤン	バング ツアハ	ヤミ	
鹿野 忠雄	タイヤル	サイ セット	ブヌン	—	ツォウ		—	パイワン		アミ	ヤミ	
古野 清人	アタイヤル	サイ シアト	ブヌン	—	ツォウ	バ イ ワ ン (ルカイ, バナバナヤンを含む)				アミ	ヤミ	熟蕃
馬淵 東一	アタイヤル	サイ シャット	ブヌン	—	ツォウ	ルカイ	—	パイワン	プユマ バナバ ナヤン	アミ パンツァ	ヤミ	

文献 ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ その他を整理

～ 19

## 参 考 文 献

- ① 伊能嘉矩 1918『理蕃誌稿 第一第二編』  
p. 1
- ② 古野清人 1945『高砂族の祭儀生活』『著作集 1』 p. 13
- ③ 馬淵東一 1954「高砂族の分類—学史的回顧」『民族学研究』18-1・2 : p. 10
- ④ “ ” 1966「たかさごぞく」『世界大百科事典』14 : p.p 322～324
- ⑤ 末成道男 1983『台湾アミ族の社会組織と変化—ムコ入り婚からヨメ入り婚へ—』 p. 4
- ⑥ 戴 国輝 1981「霧社蜂起事件の概要と研究の今日的意味—台湾少数民族が問いかけるもの—」『台湾霧社蜂起事件 研究と資料』 p. 13
- ⑦ 陳 奇祿 1974「高砂族物質文化」『えとのす』1 : p.p 21～22
- ⑧ 伊能嘉矩 1904『台湾蕃政志』例言 p.2.  
(1973年, 台北古亭書屋復刻版)
- ⑨ 伊能嘉矩, 栗野伝之丞 1900『台湾蕃人事情』
- ⑩ 伊能嘉矩 1904『台湾志』例言 p.2. (1973年, 台北古亭書屋復刻版)
- ⑪ 入江 英 1896「台湾蕃俗図会」『風俗画報』臨時増刊 129
- ⑫ 清水光憲 1900『台湾地誌及言語集』 p. 17
- ⑬ 鳥居龍藏 1910「人類学研究・台湾の原住民(一)序論」, 1910年, 『東京帝国大学理科大学紀要』第28冊第6編, 全集5巻 p.9
- ⑭ “ ” 1902「紅頭嶼土俗調査報告」『全集 5巻』
- ⑮ “ ” 1899「人類学写真集 台湾紅頭嶼之部」『全集 11巻』
- ⑯ 森丑之助『台湾蕃族志』第一巻 p.p 8, 1917年
- ⑰ 台湾総督府蕃務本署 1911『Report on the Control of the Aborigines in Formosa』
- ⑱ 畑中市藏 1936『台湾戸口制度大要』 p.130
- ⑲ 岩城亀彦 1943『台湾理蕃誌要綱』 p.1
- ⑳ 馬淵東一 1954「高砂族に関する社会人類学」『民族学研究』18-1・2 p. 90
- ㉑ 吉原弥生 1967「日文書刊所載有關台湾土著論文目録(一)」『国立台湾大学考古人類学刊』第29,30期合刊 p.p 71～206.
- ㉒ 鹿野忠雄 1941「台湾原住族の分類に対する一試案」『民族学研究』7-1 p. 1～32
- ㉓ 移川子之藏他 1935『台湾高砂族系統所属の研究』
- ㉔ 小川尚義, 浅井恵倫 1935『原語による台湾高砂族伝説集』